

建学の理念

——実学主義の伝統——



創設者 榎本武揚子爵

東京農業大学は明治24年3月6日、榎本武揚^{えのもとたけあき}によって、徳川育英会を母体にした私立育英黌農業科として設置されました。

育英黌の後身「東京農学校」第2回卒業式の式辞として榎本武揚は、次のように述べています。

「我農民特有の能力に加ふるに、學術と実験とを以て、農業に属する各般の改良を図らば、其の国家の富源を増進すべきこと、決して擬を容るべからず。(中略)諸子其れ本校に於て得たる所の技能を實際に施し、以て父兄の業を拡張し、更に進んで国家富強の基を開かれんこと拙者が諸子に望む所なり。」

この言葉は、農業の発展が近代国家の建設にとって極めて重要であり、それを担う農業後継者である卒業生に送ったものです。当時は官立の農学校の草創期でしたが、官吏養成を主目的としない、わが国はじめての私立の農学校として設立した本学の建学の理想がうかがえます。



初代学長 横井時敬博士

本学の建学の理念を築いたのは、明治30年から昭和2年までの30年間、心血を注いで本学を育成した、わが国近代農業の鼻祖といわれる初代学長横井時敬^{よこいときよし}です。

横井時敬は農学の教育研究をとおして農業、農業関連産業及び農村文化・農村社会の発展に寄与する人材の育成を目指し、その教育理念を「実学主義」におきました。横井時敬の「稲のことは稲にきけ、農業のことは農民にきけ」は、今もって本学における研究教育の精神的支柱になっており、観念論を排し実際から学ぶ姿勢をこの言葉に込めています。

そして「人物を畑に還す」と、「農学栄えて農業亡ぶ」という警世の句を残し、教育研究は学問のための学問を排し産業界から遊離しない実学研究でなければならないとしました。

また人格の陶冶を、質実剛健^{しつじつこうけん}、独立不羈^{どくりつふき}、自彊不息^{じきょうやまず}の言葉で表現し、「気骨と主体性」をもった人物の育成を目指しました。

大学の沿革



第一回生卒業記念写真（明治26年）

- 1891(明治24)年 徳川育英会による育英黌農業科として、東京市麴町（現千代田区）飯田河岸に設立。
管理長は榎本武揚、黌長は永持明德
- 1892(明治25)年 東京市小石川区（現文京区）大塚窪町に移転。育英黌分黌農業科となる。
- 1893(明治26)年 私立東京農学校と改称
- 1897(明治30)年 大日本農会附属私立東京農学校と改称。教頭に横井時敬就任
- 1898(明治31)年 東京府豊多摩郡渋谷村常盤松（現渋谷区渋谷4丁目）に移転
- 1901(明治34)年 大日本農会附属私立東京高等農学校と改称
- 1903(明治36)年 専門学校令による許可を受ける。
- 1905(明治38)年 農商務省から耕地整理講習部設置委託の命令を受ける。
- 1907(明治40)年 校長に横井時敬就任
- 1911(明治44)年 私立東京農業大学と改称し、初代学長に横井時敬就任
大学部（本科、予科）及び高等科設置
- 1913(大正2)年 大学構内に東京農業大学肥料分析講習部（後に農芸化学講習部と改称）を設置
- 1924(大正13)年 大学構内に東京高等造園学校を設立
- 1925(大正14)年 財団法人東京農業大学の認可を受ける。大学令による東京農業大学となり農学部農学科及び予科を設置
専門学校令による東京農業大学を東京農業大学専門部と改称し、農学科及び農芸化学科を設置
- 1927(昭和2)年 第2代学長に吉川祐輝就任
- 1937(昭和12)年 専門部に農業拓殖科（後に開拓科と改称）を増設
- 1938(昭和13)年 農学部^{きつかわすける}に農業経済学科を増設
- 1939(昭和14)年 第3代学長に佐藤寛次就任
- 1940(昭和15)年 専門部に農業工学科（後に農業土木学科と改称）を増設
- 1941(昭和16)年 専門部に農村経済科を増設

- 1942(昭和17)年 東京高等造園学校を合併し、専門部に造園科(後に緑地土木科、さらに緑地科と改称)を増設
- 1945(昭和20)年 農学部¹に農芸化学科及び農業土木学科を増設
5月戦災をこうむり校舎、諸設備の大部分を焼失。終戦とともに樺太農場(約192ha)、満州農場(7,500ha)を失う。
- 1946(昭和21)年 東京都世田谷区(現在地)の旧陸軍機甲整備学校跡に移転
- 1947(昭和22)年 千葉県茂原市に千葉農学部²を開設し、専門部林業科と畜産科を増設。専門部開拓科を廃止
- 1949(昭和24)年 学校教育法による新制大学設置の認可を受け、農学部³に農学科・林学科・畜産学科・農業化学科・農業工学科・農業経済学科・緑地学科・協同組合学科(25年廃止)を設置
- 1950(昭和25)年 東京農業大学短期大学を併設。
- 1951(昭和26)年 学校法人東京農業大学の寄附行為設置が認可された。
- 1953(昭和28)年 農学部⁴に醸造学科を増設
大学院農学研究科⁵修士課程農学専攻、農業経済学専攻を設置
- 1954(昭和29)年 農業化学科を農芸化学科に改称
- 1955(昭和30)年 第4代学長に千葉三郎⁶就任
- 1956(昭和31)年 農学部⁷に農業拓殖学科を増設。緑地学科を造園学科に改称
短期大学に栄養科増設
- 1957(昭和32)年 大学院農学研究科⁸に修士課程農芸化学専攻を増設
- 1959(昭和34)年 大学院農学研究科⁹に博士課程農芸化学専攻を増設
第5代学長に三浦肆玖楼¹⁰就任
- 1961(昭和36)年 第6代学長に内藤 敬¹¹就任
- 1962(昭和37)年 農学部¹²に栄養学科を増設
大学院農学研究科¹³に博士課程農学専攻及び農業経済学専攻を増設
- 1968(昭和43)年 栄養学科を栄養学専攻と管理栄養士専攻に専攻分離し、昭和40年度入学生に遡って適用した。
- 1971(昭和46)年 第7代学長に平林 忠¹⁴就任
- 1975(昭和50)年 第8代学長に鈴木隆雄¹⁵就任
- 1985(昭和60)年 短期大学長に石丸圀雄¹⁶就任
- 1986(昭和61)年 大学院農学研究科¹⁷に修士課程林学専攻、畜産学専攻、食品栄養学専攻を増設
- 1987(昭和62)年 第9代学長に松田藤四郎¹⁸就任
- 1989(平成元年) 北海道網走市に生物産業学部(生物生産学科・食品科学科・産業経営学科)を新設
短期大学長に松田藤四郎就任
- 1990(平成2)年 大学院農学研究科¹⁹林学専攻、畜産学専攻の修士課程を博士前期課程とし博士後期課程を増設。博士後期課程生物環境調節学専攻、修士課程農業工学専攻、醸造学専攻、国際農業開発学専攻、造園学専攻を増設
東京農業大学短期大学を東京農業大学短期大学部と校名変更
- 1991(平成3)年 農学部²⁰農業拓殖学科を農学部国際農業開発学科に改称
天皇皇后両陛下ご臨席のもと創立100周年記念式典を挙行
- 1992(平成4)年 短期大学部²¹農業科を、生物生産技術学科と環境緑地学科の2学科に改組
短期大学部²²醸造科を醸造学科に、栄養科を栄養学科に改称

1993(平成5)年	大学院生物産業学研究科修士課程生物産業学専攻を増設
1995(平成7)年	大学院生物産業学研究科生物産業学専攻の修士課程を博士前期課程とし博士後期課程を増設
1998(平成10)年	農学部10学科を、農学部(農学科、畜産学科)、応用生物科学部(バイオサイエンス学科/新設、生物応用化学科/農芸化学科改称、醸造科学科/醸造学科改称、栄養科学科/栄養学科改称)、地域環境科学部(森林総合科学科/林学科改称、生産環境工学科/農業工学科改称、造園科学科/造園学科改称)、国際食料情報学部(国際農業開発科学科、食料環境経済学科/農業経済学科改称、生物企業情報学科/新設)に改組 神奈川県厚木市船子に厚木キャンパス(農学部)新設
1999(平成11)年	第10代学長に ^{しんじいそや} 進士五十八就任
2002(平成14)年	大学院農学研究科に修士課程バイオサイエンス専攻、国際バイオビジネス学専攻を増設。醸造学専攻、食品栄養学専攻、農業工学専攻、造園学専攻、国際農業開発学専攻の修士課程を博士前期課程とし博士後期課程を増設
2004(平成16)年	大学院農学研究科バイオサイエンス専攻、国際バイオビジネス学専攻の修士課程を博士前期課程とし博士後期課程を増設
2005(平成17)年	国際食料情報学部生物企業情報学科を国際バイオビジネス学科に改称 大学院農学研究科博士後期課程生物環境調節学専攻を環境共生学専攻に改称 第11代学長に ^{おおさわかんじ} 大澤貫寿就任
2006(平成18)年	農学部バイオセラピー学科、生物産業学部アクアバイオ学科を増設
2010(平成22)年	生物産業学部食品科学科を食品香粧学科に改称 大学院農学研究科に修士課程バイオセラピー学専攻を増設 大学院生物産業学研究科博士前期課程にアクアバイオ学専攻を増設、既存の生物産業学専攻の博士前期課程を、生物生産学専攻、食品科学専攻、産業経営学専攻の3専攻に改組
2012(平成24)年	大学院農学研究科バイオセラピー学専攻の修士課程を博士前期課程とし、博士後期課程を増設 生物産業学部産業経営学科を地域産業経営学科に改称
2013(平成25)年	第12代学長に ^{たかのかつみ} 高野克己就任 大学院生物産業学研究科博士前期課程食品科学専攻を食品香粧学専攻に改称
2014(平成26)年	応用生物科学部栄養科学科(食品栄養学専攻・管理栄養士専攻)を食品安全健康学科と栄養科学科の2学科に改組
2016(平成28)年	短期大学部栄養学科を廃止 秋篠宮文仁親王殿下ご臨席のもと創立125周年記念式典を挙行
2017(平成29)年	生命科学部(バイオサイエンス学科・分子生命化学科・分子微生物学科)を新設、 地域環境科学部に地域創成科学科、国際食料情報学部国際食農科学科を増設
2018(平成30)年	農学部畜産学科を動物科学科に改称 農学部生物資源開発学科、デザイン農学科を増設 応用生物科学部生物応用科学科を農芸化学科に改称 生物産業学部4学科を、生物生産学科を北方圏農学科に、アクアバイオ学科を海洋水産学科に、食品香粧学科を食香粧化学科に、地域産業経営学科を自然資源経営学科に改称 大学院農学研究科に食品安全健康学専攻修士課程を増設 短期大学部を閉学



「農のこころ」を育む

東京農業大学
学長 たかの 高野 かつみ 克己

入学おめでとう。大学を代表して心から歓迎いたします。

東京農業大学は、明治期に通信、文部、外務、農商務大臣を歴任した近代日本の国際人であり、科学者でもある子爵榎本武揚公により、明治24（1891）年に徳川育英会を母体とした私立育英黌農業科として創設され、今年で創立128周年を迎えます。

榎本公は、徳川幕府から留学生としてオランダへ派遣され、蒸気機関学、船舶運用術などの専門を学び、さらには科学全般や国際法などの分野も貪欲に勉強し見識を広げられました。帰国後は、経験により得た知識や見識により、当時我が国では誰も試みることがなかった石鹼やチョーク、焼酎の製法などを研究し製造しました。そしてその実学的経験から、産業発展には先進の科学技術、特に「農業」の発展こそが近代国家の建設に極めて重要であると考え、本学を創設したのです。

榎本公が重要視した農場実習や農家支援などの実学教育を継承し発展させたのが日本農学の先駆者である初代学長の横井時敬先生です。本学の教育研究の理念「実学主義」は、横井先生の言葉「稲のことは稲にきけ、農業のことは農民にきけ」に込められています。机上の理論ではなく、現場で自ら課題を発見し、自ら考え科学的に実証するということです。また現在においてはSNSの普及やAI等の日進月歩の先端技術によりコミュニケーションや情報共有の方法も大きく変化していく中、学生自身が「現場」で「五感」を駆使して思考し解決方法を探るという不変の原理は何より大切だと確信しています。

私たちの住む地球は、気候変動に伴う環境変化や自然災害の増加、食料危機などのあらゆる課題に直面しています。これらすべては「農」の研究領域であり、地球上の人類を含む生物の「生きる」を支えることは東京農大生に課せられた使命です。各学部・学科・研究室での取組は、国連で採択された持続可能な開発目標SDGsにいずれもが合致しており、教育研究フィールドは国内の各地域から全世界へと多岐に渡ります。

これから皆さんは、地域や現場に立脚しグローバルな視点から生命・食料・環境・健康・エネルギー・地域創成をキーワードとした勉学、課題解決に努めていきますが、現代では各学問分野における境界線や限界は無くなっています。全体を俯瞰した視点のもと「縦割り」から「横串」の感覚を持ち、命の大切さ、尊さ、他者を思いやる気持ちをもった「農のこころ」を育んでください。

学内外の仲間、教職員とコミュニケーションをよくとり、学生生活を有意義に過ごしてください。この学生生活ハンドブックを有効に活用し、いきいきとチャレンジ精神旺盛なキャンパスライフを送ることを希望しています。

2019年度 役 職 一 覧

東京農業大学

学長 高野 克己
副学長 夏秋 啓子
副学長 新部 昭夫

< 厚木キャンパス >

■農学部

農学科
動物科学科
生物資源開発学科
デザイン農学科
農学研究所
伊勢原農場
富士農場
植物園
食品加工技術センター
バイオセラピーセンター
電子顕微鏡室
動物衛生管理室

学部長 小川 博
学科長 馬場 正
学科長 桑山 岳人
学科長 小島 弘昭
学科長 長島 孝行
所長 小川 博
農場長 石川 一憲
農場長 桑山 岳人
園長 宮本 太
センター長 多田 耕太郎
センター長 土田 あさみ
室長 長島 孝行
室長 増田 宏司

< 世田谷キャンパス >

■応用生物科学部

農芸化学科
醸造科学科
食品安全健康学科
栄養科学科
応用生物科学研究所
食品加工技術センター

学部長 本間 和宏
学科長 樋口 恭子
学科長 藤本 尚志
学科長 阿久澤 さゆり
学科長 松崎 広志
所長 本間 和宏
センター長 本間 和宏

■生命科学部

バイオサイエンス学科
分子生命化学科
分子微生物学科
生命科学研究所
アイトープセンター
菌株保存室
高次生命機能解析センター

学部長 矢嶋 俊介
学科長 中村 進一
学科長 冨澤 元博
学科長 内野 昌孝
所長 矢嶋 俊介
センター長 冨澤 元博
室長 田中 尚人
センター長 喜田 聡

■地域環境科学部

森林総合科学科
生産環境工学科
造園科学科
地域創成科学科
地域環境研究所
奥多摩演習林
電子顕微鏡室

学部長 小梁川 雅
学科長 佐藤 孝吉
学科長 三原 真智人
学科長 服部 勉
学科長 竹内 康
所長 小梁川 雅
演習林長 福永 健司
室長 矢口 行雄

■国際食料情報学部

国際農業開発学科
食料環境経済学科
国際バイオビジネス学科
国際食農科学科
国際食料情報研究所
宮古亜熱帯農場

学部長 菅沼 圭輔
学科長 入江 憲治
学科長 高柳 長直
学科長 土田 志郎
学科長 稲泉 博己
所長 菅沼 圭輔
農場長 杉原 たまえ

■大学院農学研究科

< 厚木キャンパス >

農学専攻
畜産学専攻
バイオセラピー学専攻

委員長 上原 万里子
主任教授 雨木 若慶
主任教授 野村 こう
主任教授 宮本 太

< 世田谷キャンパス >

バイオサイエンス専攻
農芸化学専攻
醸造学専攻
食品栄養学専攻
林学専攻
農業工学専攻
造園学専攻
国際農業開発学専攻
農業経済学専攻
国際バイオビジネス学専攻
環境共生学専攻
食品安全健康学専攻

主任教授 小川 英彦
主任教授 松島 芳隆
主任教授 前橋 健二
主任教授 服部 一夫
主任教授 山崎 晃司
主任教授 田島 淳
主任教授 高橋 新平
主任教授 山田 隆一
主任教授 堀田 和彦
主任教授 畑中 勝守
主任教授 椋村 修生
主任教授 大石 祐一

■学生部長（世田谷）

古庄 律

■学生部長（厚木）

多田 耕太郎

■図書館（世田谷）

館長 杉原 たまえ

■学術情報センター（厚木）

センター長 和久井 健司

■コンピュータセンター

センター長 高橋 新平

■総合研究所

所長 山本 祐司

■国際協力センター

センター長 坂田 洋一

■エクステンションセンター

センター長 大浦 裕二

■教職・学術情報課程

主任 上原 巖

■「食と農」の博物館

館長 江口 文陽

■生物資源ゲノム解析センター

センター長 矢嶋 俊介

各学部、各学科及び課程の目的

各学部、各学科及び課程においては、建学の理念に基づき、人材養成と教育研究の面からそれぞれの目的を以下のとおり定めている。

農学部

本学部は、環境、生物の多様な機能、生産農学に対する基礎的な理解を基に、生命科学や最新の技術を取り入れ、時代に即した農学の発展に資することを目的としている。特に、生物多様性の保全と利用、農畜産物の生産、植物・動物や食の持つ様々な機能の活用などの学際的な領域までを対象として教育・研究を行い、豊かな心と実学的知力を養い国内外において地域リーダーとして活躍できる意欲と能力を持った人材を養成する。

農学科

本学科は、消費者のより健康で豊かな生活に資する農産物の安定生産のための理論を構築するとともに、それらを基にした技術を開発して、農業の発展に資することを目的としている。そのために、農作物の特質、栽培技術等の学理を追求することを通して、持続可能な次世代型農業の創造に貢献できる教育・研究を行う。また、実学的な教育の実践のほか、課外活動への参加も推進することによって、国内はもとより世界の農業や、それを取り巻く広範囲な分野で羽ばたくことのできる人材を養成する。

動物科学科

本学科は、動物の生命現象や機能を理解することによりその制御を追究する生命・制御分野と、動物の行動と生産性を追究する機能・生産分野の2領域を包含し、これらの特性を活かした応用技術開発を目指す。課程を通じて生命の尊厳や倫理を学び、豊かな心を持ち、医・薬・理学の領域まで広がりを見せる生命科学関連および良質で安全な食料を生産する生産科学領域で活躍できる人材を養成する。

生物資源開発学科

本学科は、農業生態系のみならず、人類が将来にわたり安定した生活を維持するために不可欠な自然生態系に至る多様な生物を資源として捉え、その多様性に関する知識と理解を基礎として、様々な生物の生育・生息環境の保全を実践する技術と、生物資源の持続可能な利活用や開発に必要な技術を修得し、農学領域の諸課題の解決に寄与しうる能力を有した人材を養成する。

デザイン農学科

本学科は、世界の食料問題、資源・エネルギー問題を広く俯瞰しながら生物やその生産物の持つ多面的な機能性に注目し、その利用技術、新機能性製品の開発、食農システムの構築を通じ、豊かで持続的な社会・地域・生活を、農学科学的な発想・知識・技術をもってデザインし、実現していくことが出来る人材を養成する。

応用生物科学部

本学部は、動植物・微生物等が営む生命現象について理解と解析能力を高め、人と環境との共生の上に成り立つ生活を真に考究し、実践出来る人材育成を教育理念としている。本理念の達成に向け、生物、化学及び生物化学を基礎学問に据え、講義と実験・実習さらには卒業論文実験を通じて、学力の向上と国際的研究を目指す。

農芸化学科

本学科は、化学と生物学の素養と知識を基礎に生命現象から環境問題までを多角的に理解・解析できる人材を養成する。その目的を達成するため、食料・健康・環境・資源エネルギーにかかわる諸問題を対象として、基礎から応用にわたる実学的教育・研究プログラムに基づいた教育をする。

醸造科学科

本学科は、わが国唯一の醸造・発酵技術関連の高等教育研究機関である。微生物利用産業における伝統技術から、最新のバイオテクノロジーに至る幅広い分野の教育研究を行っている。当該分野の基礎知識及び総合的技能を有する醸造・食品・微生物利用産業の発展に寄与する人材を養成する。

食品安全健康学科

本学科は、食の安全と健康機能を統合した学問領域を科学するため、幅広い基礎科目を基盤とし、多様な専門コア科目による教育を展開することにより、食の安全・健康上の問題解決力を備えた食品技術者・研究者・教育者・行政官となり得る人材育成を行う。

栄養科学科

本学科は、食品に含有される栄養成分・非栄養成分が生体に与える影響を理解し、食品の調理、加工、食事の提供などに応用されるまでの理論と技術の習得や、人間を対象に、健康の保持・増進と生活習慣病の予防・改善の要となる栄養学を追究し、実践的な理論を科学し、技術を習得することを目的とする。これらの知識や技術にプラスして「高度の専門的知識および技術を要する健康の保持・増進のための栄養指導者」としての管理栄養士養成を行う。

生命科学部

本学部は、多様な生物をマイクロからマクロまで統合的に捉えることで、現代社会が直面する問題解決の取組みに必要な教育研究を行う。また、その過程を通して、汎用的な基礎力と専門的な応用力を磨き、知識・技術・経験をもとに、自ら問題発見と解決方法を見いだすことに挑戦し、倫理観をもって社会に貢献できる人材を養成する。

バイオサイエンス学科

本学科は、原核細胞から真核細胞、さらに動物・植物の個体レベルにおける、生命現象の分子機構の理解と研究を通して、生命現象の本質を理解し、生命科学を利用して社会貢献できる人材、さらに、研究や開発等の生命科学領域で幅広く活躍するための礎となる深い洞察力と問題解決能力を身につけた個性豊かな人材を養成する。

分子生命化学科

本学科は、21世紀に入り目まぐるしく変動する自然環境・社会及び農業情勢を理解し、科学技術により柔軟かつ多様な対応が可能な、農学領域の視野を持ち汎用性のある基礎力を有する人材が求められていることから、様々な自然・生命現象に対し、分子論的な解釈と化学的なアプローチを行うことができ、また他分野への応用・発展を可能とする人材を養成する。

分子微生物学科

本学科は、微生物の様々な機能を駆使する微生物開発・利用が望まれていることを踏まえ、有用な微生物資源の探索と培養工学を駆使した微生物機能の開発、並びに微生物間及び動・植物との相互作用における多様な生命現象を分子の視点から理解し、物質生命技術の開発や環境問題・エネルギー問題など現代社会の諸問題の解決に貢献する人材を養成する。

地域環境科学部

本学部は、生物に対する深い理解を基調とし、自然と人間の調和ある地域環境と生物資源の保全・利用・管理のための科学技術を確立することを目指すものである。さらに、ミクロな地域環境問題の解決はもとより、マクロな広域環境問題、さらにはグローバルな地球環境問題の解決に貢献する人材を養成する。

森林総合科学科

本学科は、人間と森林の共生に貢献できる人材の育成が、教育・研究目標である。森林そのものと環境循環について科学的に理解することからはじまり、森林のもつ資源生産的機能と環境循環機能を総合的に考究するなかで、これからの循環型社会の創造に貢献できる専門知識を養う。

生産環境工学科

本学科は、農業生産の場における土・水・施設・機械に関する技術を応用し、地域から地球規模まで考慮した環境保全に資する新たな農業生産技術とエコ・テクノロジーの開発を行うとともに、生産性向上のみでなく、環境・資源・エネルギーに配慮した計画・設計・施工・管理を行える倫理観を持った技術者を養成する。

造園科学科

本学科は、庭園文化を踏まえ、人間と自然の調和共生社会の実現をめざし、都市から田園、自然地域にわたる国土の環境と景観を保全・活用し創造するための、調査・計画・設計・施工・管理・運営及び材料に関する理論と応用を教授し、豊かな感性とデザイン力、確かな倫理観を持つ造園家、造園技術者を養成する。

地域創成科学科

本学科は、水資源や食料生産、環境保全等の役割を担ってきた農山村地域の保全・再生、持続的発展に向けて、生命多様性や生態系に配慮した土地利用方法、地域防災や農業基盤に関連する保全・管理技術、環境アセスメント手法や環境教育・地域マネジメント手法等の幅広い専門的能力とその運用法を習得し、地域の創成に貢献できる人材を養成する。

国際食料情報学部

本学部は「日本と世界の食料・農業・農村問題の解決に向けて、国際的情報網の活用のもと総合的・実践的に挑戦する」をモットーに、農業・農村開発と国際協力の推進、持続可能な食料・農業システムと循環型社会の構築、食料の生産・加工・流通・支援サービスを担う農業・食品系ビジネスの展開及び日本が誇る食農文化の継承・発信や新たな食農文化の創造等の分野で活躍できる人材を養成する。

国際農業開発学科

本学科は、自然科学と社会科学の両領域からなる科目を配し、さらに、国内外の農業実習・研修を積極的に取り入れ、「専門性を活かした総合的アプローチ」をモットーに、農業・農村開発協力を通じて国際貢献のできる人材を養成する。

食料環境経済学科

本学科は、社会科学、とりわけ経済学的手法を用いて、「農業」「食料」及び「環境」を取り巻く課題を地域的・国民的視点、さらには国際的視点から究明し、もって「新たなフードシステムの構築」及び自然と人間の共生を軸とした「持続的な循環型社会の構築」に資する人材を養成する。

国際バイオビジネス学科

本学科は、人類の生存に最も重要な食料を支えるバイオビジネスに関する教育・研究を行い、食料の生産、加工、流通、支援サービスを担う専門知識と実践力を身につけた国際的人材を養成する。

国際食農科学科

日本が誇る食と農の文化を世界に向けて積極的に発信することは、厳しい国際競争の下に置かれている日本の農業・農村にとって喫緊の課題であることから、本学科は、この課題の解決に向けて、日本の多様な地域が伝統的に育んできた固有の食農文化を、食農教育を通じて継承するとともに、より付加価値の高い農産物等の食材を基にした新たな食農文化を創造し、地域から世界に向けて展開・発信できる人材を養成する。

教職・学術情報課程

本課程は、知識・品位・技能を兼ね備えた熱意あふれる教員並びに博物館・図書館等における各種情報の調査・収集・整理・保管・検索・提供等の実務に取り組む実践的かつ専門的知識を身につけた学芸員及び司書を養成する。

2019年度 年間行事計画

(農学部・応用生物科学部・生命科学部・地域環境科学部・国際食料情報学部)

月	日 (曜日)	行 事 予 定
4	2 (火) 3 (水) ~ 6 (土)	入学式 新入生各学科ガイダンス, 新入生健康診断 在学生ガイダンス, 在学生健康診断 新入生オリエンテーション
	8 (月) 30 (火)	前学期授業開始 (7/26まで) 【休講日】
5	1 (水)	【休講日】 天皇即位の日
	2 (木)	【休講日】
	6 (月) 18 (土)	【授業日】 こどもの日の振替休日 大学の記念日
6	1 (土)	教育懇談会
	15 (土)	東京農大ホームカミングデー
7	15 (月)	【授業日】 海の日
	20 (土)・21 (日)	教育後援会地方懇談会
	29 (月)	} 前学期定期試験
2 (金)	オープンキャンパス (世田谷キャンパス・厚木キャンパス)	
8	4 (日)・5 (月)	} 夏季休業 夏季集中授業
	5 (月)	
	上旬	
9	19 (木)	} 後学期授業開始 (1/24 まで) 【授業日】 秋分の日
	20 (金)	
	23 (月)	
10	14 (月)	【授業日】 体育の日
	22 (火)	【休講日】 即位礼正殿の儀
	31 (木)	} 収穫祭の実施に伴う休講期間
5 (火)	(世田谷キャンパス) 前夜祭10/31, 収穫祭11/1~3 (厚木キャンパス) 前夜祭11/1, 収穫祭11/2・3 (両キャンパス共通) 準備10/31, 体育祭11/4, 後片付け11/5	
11	16 (土)・17 (日)	推薦入試及び優先入試
	30 (土)	転入学, 編入学, 運動選手, 外国人及び帰国子女入試
	25 (水)	} 冬季休業
3 (金)	後学期授業再開	
1	6 (月)	【休講日】 センター試験準備日
	17 (金)	
	18 (土)・19 (日)	【休講日】
	22 (水)	
	24 (金)	} 後学期定期試験
	27 (月)	
31 (金)		
2	5 (水) ~ 7 (金)	一般入試A日程
	中旬	後学期定期試験の評価開示
3	27 (木)	一般入試B日程
	6 (金)	学校法人の創立記念日
	12 (木)	卒業確定者及び進級確定者の発表
3	20 (金)	学位記授与式 (世田谷キャンパス)
	21 (土)	学位記授与式 (厚木キャンパス)

注：上記のスケジュールはいずれも予定であり，変更することがあります。
変更が生じた場合は，随時，学生ポータル等にて周知しますので確認してください。